

# ハウズミルのアマダ・スミスのお話



1838年10月30日、ミズーリの暴徒はハウズミルとして知られる末日聖徒の集落を襲いました。避難場所を探して民を守ろうと鍛冶屋に入っていた末日聖徒の男性や少年が銃撃されて17人が殺され、十数人が負傷しました。

負傷者の一人である6歳のアルマ・スミスは、銃撃で片方の股関節を完全に失いました。母親アマダ・バーンズ・スミスはアルマを見つけて動転し、さらにこの襲撃で夫と10歳の息子を失って嘆き悲しましました。

だれの助けも得られない中、アマダは残りの子供を集め、導きを求めて祈りました。「ああ、天のお父様、お父様はわたしの哀れな息子が負傷したこと、そしてわたしの未熟さを御存じです。ああ、天のお父様、何をすべきかお教えください。」

祈り終わると、アマダは灰と水を混ぜるようにと指示する声を聞き、その灰水を使って、アルマの傷をきれいになるまで洗いました。次に、ニレの木から根を取ってきて、どろどろになるまですりつぶすようにという促しを感じました。アマダはそれをアルマの傷口に塗り、亜麻布で包んで言いました。

「さあ、そのまま横たわって、動かないようにしなさいね。そうすれば、主があなたに別のお尻を授けてくださるから。」

アルマが負傷したために、アマダと家族は襲撃後も避難することができませんでした。数週間たち、暴徒は彼女や残りの聖徒たちに立ち退きの最終期限を決めました。その日が近づくにつれ、アマダの恐れは増していきます。人に聞かれることなく声に出して祈れるように、トウモロコシの茎の束に身を潜めました。すると、次の言葉を繰り返す声が聞こえました。

「主、われに頼るものの霊

敵の手には渡し得ず

地獄、彼に迫るとも

われその霊を見捨てはせず 必ずわれは見捨てず」

賛美歌「主のみ言葉は」（『賛美歌』46番）の歌詞は、アマダに新たな強さと勇気を得させました。

それから間もなく、家で子供たちが叫ぶ声が外まで聞こえてきました。急いで家に入ってみると、アルマが部屋を走り回っています。「ママ、ぼくは元気だ、元気だよ！」アマダと子供たちはそれから間もなくハウズミルを離れました。

（『聖徒たち』第1巻、332-335、337-339、359-360から引用して要約）